

湘南 OT-WEB ワークショップ

○湯浅健太郎，藤本一博

湘南 OT 交流会

【はじめに】

日本作業療法士協会資料によると、協会会員の 30%は作業療法士免許を取得してから 5 年以下の若い集団となっている。毎年 3000 人以上の新しい作業療法士が生まれ、若手が新人を教育することを求められている状況もある。卒後教育は職場によって大きく異なり、手続的な規則を伝達されるのみで、作業療法に関する教育がされない環境も少なくないと聞いている。その状況を打開し作業療法の知識や技術を学びたいと、講習会への参加を考え行動している新人や若手も多いが、都市部での開催が多く、居住地によっては大きな負担を強いられるとの問題もある。そして会員の年齢を見ると、26 歳から 35 歳の会員が圧倒的に多く、結婚や出産などのライフイベントを経験し、講習会への参加が困難な時期であるとの声も少なくない。

そこで湘南 OT 交流会では、WEB 上に講演コンテンツ、一般演題コンテンツ、ワークショップコンテンツを用意し、24 時間いつでもどこでも、インターネットが接続できる環境であれば、コンテンツを見ることができる WEB 学会を立ち上げた。2016 年の初回開催から 3 年が経過し、30 分程度の講演は全部で 20 講演、一般演題は全部で 30 演題あり、常時アクセス可能な状態にある。2019 年からは、院内勉強会や友人知人間で共有できるワークショップ的なコンテンツも用意した。

【企画内容】

今回は当会が公開しているワークショップコンテンツの中から、スケジュール評価を参加者と共有させていただきたい。これは 20 分のスケジュール評価に関する講演を見た後に、当会が用意している実際の評価表結果をもとに、対象者に合った作業を立案する演習プログラムである。

【今後の展望】

本プログラムを体験していただき、セッティング方法や勉強会の進行方法を体験していただければ、みなさんの職場でも同様の勉強会が簡単に開催できます。近年の課題である卒後教育の新たな形として、当会のコンテンツを利用していただければ幸いです。

臨床実習の creative destruction ー自己教育力に焦点を当ててー

○三崎 一彦, 高波 実佳, 齋藤 駿太, 作間 弘彬, 白井 美奈子

小樽臨床作業療法研究会

平成 30 年に指定規則が改定され, その中で実習は診療参加型が望ましいと明記された. すなわち, これからまさに臨床実習の creative destruction が始まる. その新しい時代が訪れる前に, 果たして我々はどのような準備をすべきか?

教育哲学者の苦野 (2014) は, 「教育の世界に身を置いていていつも心苦しく思うのは, みんな善意や熱意から教育を論じ合うのだけれど, ある種独りよがりなそれぞれの“思い入れ”や“思い込み”がどうしても先走ってしまい, そのために, 不毛な対立がいたるところで起こってしまっていることです.」と述べている. 新しい教育方法を導入する時に, 教育の歴史をみても, 必ず信念対立が生じる. これを避けるためには, 「そもそもよい臨床実習とは, どういう実習か?」という問いに対する共通理解可能な解を得ることが必要だと考える.

著者が作業療法免許を取得した時代は, 作業療法士の就職先はほぼ病院であり, 対象となる領域も狭かった. しかし介護保険制度が始まり, 作業療法の領域は拡大し, 起業し経営者として活躍する人も増えている. 今日のような状況は, 30 年前には想像できなかったのである. つまり, 社会は絶えず変化し, 予測できない未来に対応するためには, その時の状況と目的に応じて専門知を常に更新していく力が必要である. すなわち常に学び続けることが求められる.

実習で現場の状況に身を置き, その中で学習者が必要だと思う専門知を自ら学んでいくことで, 学び続ける力を養える, そのような実習が「良い実習」であると我々は考える. この自ら学んでいく力は「自己教育力 Self-Directed Learning (SDL)」と呼ばれ, 看護教育で広く研究されている. 松澤ら (2009) は, 実習指導者の教師効力について, 学生の学習に効果的な影響を及ぼす力を教師効力と説明し, この力が高いほど自己教育力が高いことを明らかにしている. そして, 実習指導者の主体的な姿勢が学生に及ぼす影響は大きいと述べている. 臨床教育者の学生指導への意欲や取り組む姿勢などが, 学生にはロールモデルとして伝わるため, 学生の自己教育力を高める上で臨床教育者の自己教育力は特に重要である.

そこで今回は診療参加型臨床実習の一つの目的である自己教育力向上に焦点をあて, その評価方法の紹介と, 参加者の臨床教育者として必要な自己教育力を振り返る機会としたい.

Workshop of the Digital Hospital Art

○丸山祥¹⁾, 吉岡純希 (Ns)²⁾, 萩原祐¹⁾, 倉島沙耶¹⁾, 北古賀洸 (SE)¹⁾, 木下剛¹⁾

1) 湘南慶育病院リハビリテーション部 2) 慶應義塾大学 SFC 研究所

【趣旨】

私たちは、みなさまにデジタルアートの体験と、医療・介護現場におけるデジタルアート活用に向けたコラボレーションの場として本ワークショップを企画しました。興味関心のある方は、ぜひこの機会にデジタルアートを体験してみませんか？

【デジタルアートって？】

デジタルコンピュータを用いて映像や音楽などの芸術作品を制作することをデジタルアートと呼びます。ヒトの身体の動きに応じて映像や音を変化させるインタラクティブなデジタルアートは、近年エンターテインメントの分野で注目を集めており、湘南慶育病院では病棟レクリエーションの一部、あるいはケアや療法の補助手段としても用いられています。今後、医療や介護にもますます応用されていくと思われま

【ワークショップの内容】

以下 1-3 のプログラムをご用意します。実際にデジタルアートの活用の可能性を知り、実際に体験し、導入事例を知ることで、明日から活用できる情報や知識を提案します。また、デジタルアートのさらなる活用や、作業療法士の役割についても参加者の方と深めることができると考えています。

1. デジタルアートの可能性：

病院でのデジタルアートは、未だ一般的ではありませんが、実践事例が少しずつ増えてきました。病室、待合空間、患者との実践と複数の事例を紹介しながら、病院でのデジタルアートの実現可能性を紹介します。アートやテクノロジーの視点に加え、医療的なアセスメントを反映させたデジタルアートからは、新たな医療ケアの可能性を見出すことができます。

2. デジタルアートの体験：

- Leap motion センサー×花火プログラム：

- 「デジタルアートをやってみよう」：Web ブラウザで動かせるプログラムの紹介

実際のセンサーを使ったデジタルアートの体験ブースを設けて、参加者の方々に体験していただけるような機会を設けます。また、関心を持たれた参加者の方々が、実際に自施設で導入できるようなプログラムの紹介をします。

3. デジタルアートの導入例：

デジタルアートの導入は、今回、湘南慶育病院でどのように導入したのか、といった実際の導入プロセスの事例を紹介します。

【参照】

・公益社団法人日本看護協会：GRAPH アートとテクノロジーの活用で看護をよりよく変える「デジタルホスピタルアート」「Fab Nurse プロジェクト」。看護，70(6)：3-7，2018.

・http://techlabpaak.com/members_project/junki_yoshioka

・湘南慶育病院ホームページ <http://keiiku.gr.jp/>

「作業で結ぶ精神科作業療法研究」～精神科作業療法士のための テーマづくり・研究仲間づくり・未来づくり～

○清家 庸佑¹⁾, 川口 敬之²⁾, 松岡太一³⁾

- 1) 東京工科大学
- 2) 北里大学
- 3) 福井記念病院

平成が終わり新しい時代が幕を開ける今、精神科医療は改革期の真っ只中にいます。平成という括りで精神科医療を捉えると、クライアントの社会復帰に向かって大きくパラダイムシフトが起きた時代でした。平成 16 年に策定された精神保健医療福祉の改革ビジョン「入院医療中心から地域生活中心へ」は今日では誰もが知っている基本理念です。しかし、この基本理念の実現には多くの課題を残しているのもまた事実です。新たな時代が幕を開ける今、私たちに求められているのは平成に息吹いたこの理念を当たり前前の社会として実現させることではないでしょうか。新たな時代を前にこれからの私たちはどんな未来を創造していくのでしょうか。

作業療法は、作業を通してクライアントの健康と幸福の促進に貢献する実践であり、その支援は高い個別性が特徴の一つにあげられます。精神科医療でも Evidence Based Practice(EBP)が叫ばれる昨今、精神科作業療法も同様に EBP がますます求められていきます。この Evidence の実証には研究が必要不可欠です。その一方で、研究と聞くと「難しい」と苦手意識をもち、はじめの一步がなかなかでない人もいないのでしょうか。

もしそうだとしたら、それは非常にもったいないことです。目の前のクライアントに真摯に向き合い、作業に根ざした実践に取り組んでいる皆さんは、日々の臨床にたくさんの疑問や未来へのアイデアをもっているのではないのでしょうか。研究疑問というと難しく感じるかもしれませんが、「こんなことが分かればいいのに」「こんなものが臨床にあるといいのに」といった漠然とした思いでも結構です。そうしたアイデアをもとにディスカッションを行い、これからの研究テーマを発掘してみませんか。さらに他の作業療法士の考えに触れることで新しい気づきやアイデアが生まれるかもしれません。そんな作業に根ざした精神科作業療法の Evidence の構築に向けた自由な意見交換の場を企画します。当日はその他にも、研究方法や臨床研究を実際に行う上でのコツを相談するのも良し、研究協力者を募って今後の研究活動の発展に繋げるのも良しです。同じ精神科医療に従事する作業療法士だからこそその有意義で自由な情報交換の場を設けたいと思います。精神科作業療法の新しい時代に向かって新しい一步を一緒に踏み出してみましよう。